

**資料名「志和地田楽」**  
**テーマ（郷土を誇りに思う心を育てるための工夫）**

学校名（ 三次市立川地小学校 ）

- 1 学 年 第6学年
- 2 主題名 郷土を見直す 4－（7）
- 3 ねらい 林のおじいさんの話を聞いたこう太の思いを考えるを通して、地域の伝統文化を伝え  
た先人の努力を知り、自分たちもそれを受け継いでいこうとする心情を育てる。
- 4 資料名 「志和地田楽」（自作資料）
- 5 学習指導過程

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	留意点（☆評価の観点）
導 入	1 地域で続いているものについて、考える。	○ 地域で昔から続いているものに何 がありますか。 ・ 川地音頭。 ・ ふるさとまつり。 ・ 志和地田楽。	○ 写真を提示することで、資料 への関心を高める。
展 開	2 資料を読み、こう太の気持ちについて話し合う。	○ 体育館に向かう時やばちを落としたり、リズムがずれたりした時、こう太はどんな気持ちだったでしょう。 ・ 面倒くさいなあ。 ・ ゲームがしたかったのに。 ・ 今日は休みたいなあ。 ・ やっぱりやめとけばよかった。  ○ 林のおじいさんの話を聞いて、こう太はどんなことを思ったでしょう。 ・ こんな風につながっていたんだ。 ・ 志和地田楽には伝統と歴史がある。 ・ 地域の人々の願いを受けてつながっているんだ。  ◎ ばちをぎゅっとにぎりしめながら、どんなことを考えたでしょう。 ・ しっかり練習して地域の人に喜んでもらおう。 ・ ぼくたちのがんばる姿で地域の人々が元気になるなら、がんばらないといけない。 ・ 今まで続いてきた志和地田楽をぼくも続けて守っていこう。 ・ 志和地田楽も子どもも地域の宝なんだから、ぼくもつなげて守っていこう。	○ 志和地田楽に対するこう太の気持ちをおさえることで、面倒くさく、練習に身が入らず、いやいやしているこう太の気持ちに共感させる。  ○ 林のおじいさんの言葉をおさえることで、志和地田楽の歴史、先人の努力、人々の願いも受け継いでいることに気付かせる。  ○ 「ぎゅっとにぎりしめる」という言葉に着目させることで、こう太の決意を感じ取らせる。

	<p>3 「地域で続いているものを受け継ぐためにできること」を考える。</p>	<p>○ なぜ、志和地田楽も子どもも地域の宝なのでしょう。(補助発問)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域にとって大切なものだから。</li> <li>・ 地域の人の努力や思いが詰まったものだから。</li> </ul> <p>○ 地域で続いているものを受け継ぐためにできることはないだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域にどんなものがあるか知る。</li> <li>・ どんな思いで伝わってきたか、自分たちがどんな思いでしているかを伝える。</li> <li>・ やってみたいと思ってもらえるように一生懸命する。</li> <li>・ 地域の行事に参加し、応援したり見たことを伝えたりする。</li> </ul>	<p>○ 補助発問をすることで、技だけでなく、努力や思いも受け継いでいこうとする心情に迫らせる。</p> <p>☆ 先人の努力や願いを知り、こう太の受け継いでいこうとする気持ちを考えることができる。(ワークシート・発言)</p> <p>○ 導入時のものを活用することで、「受け継ぐためにできること」を自分のこととして考えられるようにする。</p> <p>☆ 郷土のよさを受け継ぐ一人として何ができるか考えることができる。(ワークシート・発言)</p>
<p>終末</p>	<p>4 友達の日記を聞く。</p>	<p>○ 社会科の学習後の日記を紹介します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 受け継がれてきた願いも大切にしておつなげているんだ。</li> </ul>	<p>○ 社会科「室町文化」の学習と志和地田楽を関連させた日記を紹介することで、伝統を受け継ぐとはどういうことなのかさらに考えられるようにする。</p>

## 活用に向けたポイント

### 1 児童の実態

本校の児童は、郷土に関するアンケート「地域の歴史や自然について関心がある」「地域の行事に参加している」「地域のことが好きだ」の設問については、80%以上の児童が肯定的な回答をしており、地域のことについてはある程度関心はもっている。しかし、「伝統を受け継いでいこう」という思いにまでには至っていない。

### 2 教材開発及び指導過程の工夫

- ・教材開発にあたっては、地域で行われている田楽の練習や敬老会に参加し、指導者、保護者や地域の方、児童から志和地田楽の歴史や志和地田楽に対する思いを聞き取って教材にする。
- ・導入で「地域で昔から続いているもの」について考えさせる。展開後段では、導入時のものを活用しながら「受け継ぐためにできること」を考えさせる。そのことにより、より自分のこととして考えられるようにする。
- ・伝統を受け継ぐとはどういうことなのか深く考えていけるように、社会科や体験活動等との関連を図る。

### 3 発問の工夫

- ・中心発問の「ぎゅっとにぎりしめる」という言葉からこう太の決意を感じ取らせ、その決意とはどんなことなのかを考えさせる。
- ・補助発問として「なぜ、志和地田楽も子どもも地域の宝なのでしょう。」と問うことにより、単に技を受け継いでいくだけでなく、努力や思いも受け継いでいくことの大切さに気付かせ、郷土を誇りに思う心情を育てる。

### 4 児童の反応

- ・「地域の人たちのがんばりをここで終わらせたくない。」「伝統を受け継いでいこう。」「ぼく

らが守っていこう。」など、ねらいとする道徳的価値に迫る意見が出た。

- ・「なぜ、志和地田楽も子どもも地域の宝なのか。」と補助発問をすることで「地域の誇り」「なくてはならないもの」という考えを引き出すことができた。

### 5 活用に当たってのポイント

- ・児童にとっては身近な題材を資料にしたことにより、こう太の思いが考えやすく、郷土を誇りに思う気持ちをもつことができたので、地域の方などから志和地田楽の歴史や思いを聞き取って教材にすることは効果的である。
- ・導入→身近な資料→展開後段へと関連を図って授業を仕組み、児童の思考の流れに沿って発問を投げかけて考えさせる。このことにより、地域の伝統を受け継ぐことについて、「観ている人がやりたいと思えるように、かっこいいと思えるように一生懸命する。」「いいところ、好きなどころを見つける。」「地域の行事に参加する。」「昔の人々の続けてほしいという思いを伝える。」などの意見が出され、ねらいとする道徳的価値に迫ることができた。
- ・社会科「室町文化」の学習や体験活動との関連を図ることにより、伝統文化や郷土のよさをより身近に感じさせることができた。振り返りでは、「自分の周りにも昔から伝えられてきたものがあり、新しいものだけに興味をもつのではなく、昔から伝えられてきたものに興味や関心をもちたい。」「実際やっけていなくてもそのすばらしさを伝えたい。」などの意見が出され、今後の自分のあり方についても考えさせることができた。

「こう太、練習が始まるよ。いつまでゲームをしているの。早く準備しなさい。」  
仕事から帰ったばかりの母が言った。

「えーっ、やっと宿題が終わって、ゲームを始めたばかりなのに。今日、休んだらだめ？」  
「何言ってるの。早くしなさい。」

母に叱られ、ぼくはしぶしぶ重い腰を上げた。今日は、志和地田楽の練習日だ。「お姉ちゃんがしているから」という理由で始めた田楽だ。それに、「田楽をやめたい。」と言ったとき、父に、  
「地域でずっと受け継がれてきたものだから小学生の間は、続けなさい。」  
って言われて、しかたなく続けている。(お父さんは、伝統、伝統って言うけれど、続けていく必要があるのかなあ。ぼくには、関係ないんだけどなあ。) そんなことを思いながら、

ぼくは母の車に乗り、体育館に向かった。  
体育館に着くと、正くんが、  
「こう太、遅かったね。今日は来ないかと心配したよ。」  
と声をかけてくれた。ぼくは、少し返事に困った。そのとき、  
「早く太鼓の準備をして。練習を始めるよ。」  
と中田さんの声が出た。中田さんは、田楽を指導しておられる方の一人だ。  
ぼくたちは、急いで準備をした。練習がいつもいやなわけではない。でも、こんな日は練習に身が入らず、ばちを落としたり、リズムがずれたり、  
思うように太鼓がたたけない。  
「こう太、今日はどうしたんだ。  
さっきから、ミスばかりしている  
じゃないか。」

中田さんに注意された。ぼくの気持ち  
伝わったのか、みんなもたいこのリズム  
ムが合わなくなって、唄が止まってしまった。  
「今日の日曜日、敬老会で発表だよ。もう少し本気で練習しよう。」  
と中田さんが、残念そうに言われた。

それでも、なかなか練習に身が入らずその日の練習は終わった。



次の日、学校から帰ると、おばあちゃんが、林のおじいさんと庭で話をしていた。林のおじいさんは、  
ぼくのうちの隣に住んでいて、昔からよく知っているおじいさんだ。

「林のおじいさん、たがいま。」

ぼくがあいさつをすると、林のおじいさんは笑顔で、

「こう太君、お帰り。敬老会で田楽をしてくれるんじゃない。楽しみにしてるよ。わしも、若いころ田楽  
をしとったんでえ。」

と教えてくれた。ぼくは、びっくりして

「じゃあ、中田さんと一緒に田楽しとったん？」  
と聞いてみた。

「そうなんよ。今から三十年ぐらい前の志和地小学校の落成式で、お祝いの出し物として、それまで長いこと途絶えていた田楽を復活させることになったんよ。おじいさんたちも、そりゃあ、一生懸命練習したんでえ。地域の人もすごく喜んでくれたけえのう。」

林のおじいさんの話を聞いて、ぼくは中田さんから聞いた話を思い出した。

「それから後もがんばって続けていたけど、それを受けついでもくれる人がいなくて困ったって中田さんが言ってたよ。」

ぼくがそう言うと、林のおじいさんは、

「そうなんよ。それで、志和地小学校の子どもたちならずと受け継いでいってくれると思って、教えに行きよったんよ。」

と言った。

(じゃけえ、ぼくらあ小学生がしよるんかあ。)

「ところで、こう太君、田楽ってどれくらい前から始まったか知っとるか。」

「三十年ぐらい前からでしょ。」

ぼくが答えると、林のおじいさんは、

「いやいや。田楽が始まったのは明治の初めごろだから、だいたい

百四十年ぐらいかのう。」

と教えてくれた。

ぼくは、田楽がそんなに昔からされているとは知らなかった。

すると、今までだまって聞いていたおばあちゃんが、

「三年前、志和地小学校が閉校になるとき、地域の人の『せっかく復活させて今まで続けてきたのに、ここで途絶えてしまうのはもったいない。ぜひ続けてほしい』という強い願いがあって『志和地子ども田楽クラブ』として川地全体で続けることになったんよ。」

と、教えてくれた。

「おじいさんたちは、みんなの田楽を観るのがとっても楽しみなんよ。今は、子どもたちの姿を見ることも少のうなって、すぐさみしいんじや。じゃけど、田楽で、みんなのがんばっている姿を見るとおじいさんたちは元気が出るんよ。志和地田楽も子どもも、地域の宝なんじや。こう太君、がんばってくれえの、みんな楽しみにしてるけえのう。」

そう言って、林のおじいさんはにこにこしながら帰っていった。

ぼくは、林のおじいさんの「志和地田楽も子どもも、地域の宝だ。」という言葉が頭から離れなかった。

今日は、敬老会前の最後の練習日。

体育館にはこうこうと明かりがついている。

今日はぼくが一番乗りだ。

(志和地田楽も子ども地域の宝だ・・・)

みんなを待つ間、ぼくは心の中で何度も繰り返し返した。

練習が始まると、太鼓を体にしっかりと結びつけ、

ばちをぎゅっとなぎりしめた。太鼓の音が体育館に

響き渡った。



日曜日、敬老会で志和地田楽を披露した。地域のお年寄りの目には涙が光っていた。ぼくのほほには心地よい初夏の風が吹いた。



題 志和地田楽

名前

番

♡ ばちをぎゅっとにぎりしめながら、どんなことを考えたでしょう。



Large rounded rectangular area with three vertical dashed lines for writing.

◎	
○	
△	
	こう太の気持ちになって考えられた
	自分の思いや考えをはっぴょうできた
	自分の考えとくらべながら聞いた
	友だちのはっぴょうを聞いて考えを深めることができた

Large empty rectangular box for writing.

今日の道徳の時間をふり返って

